

映像メディアと子どもたち

—文字テロップと中学生の言語表現力—

設 楽 馨

一、はじめに

^①国民生活時間調査におけるテレビの行為者率やテレビ視聴時間（一日）から、国民生活とテレビの関わりを見ると、テレビは国民の多くにとって日常的に接するものであることがわかる。テレビ視聴が日常生活の一部となっている事実は、当然成人に限定されない。言語獲得期にある乳幼児や、国語力を形成している小・中学生にとっても同様である。

そして子どもたちにとってのテレビは、保護者が期待するようにニュース（時事問題）や家族団らん（役立つ、知識が豊富になり学習の助けになるといった効果・効用のあるメディア）として意識されているわけではない。子どもからしてみれば、笑^②つたり楽しんだり気軽に気分転換するためのメディアとなっている。

一方、筆者はこれまで、テレビに多くの文字情報が含まれているという事実に着目し、テレビの文字情報（主に、編集時に映像に被せられる文字テロップ）について表記実態や視聴者意識を調査・研究するなかで、テレビにおける文字表記や言語表現を論じてきた。そうした経緯を踏まえ、子どもたちの言語表現力の側面から文字テロップを論じてみたい。

研究方法は、筆者が以前に行った、文字テロップに関する中学生対象の調査結果を用い、分析を加えていく。実証データに

に基づき、子どもたちの表記規範や文字テロップ観について考察し、文字テロップを介した言語表現力について論じることとする。

二、被調査者について

考察に入る前に、データの性質や被調査者の特性を整理しておく。本稿で用いるデータは、二〇〇九年に武庫川女子大学附属中学校二年生三クラス合計二二名に協力を得て実施した、質問紙による調査に基づく（以下、この調査を³）視聴調査（中学生）と称する）。当該中学校について補足すると、カリキュラムは入学年次から三コースに分かれている。三コースはそれぞれスーパーサイエンスコース（四一名）、スーパーイングリッシュコース（四〇名）、インテリジェンスコース（四〇名）と称し、被調査者は各コースのクラスずつとなるように選定している。

学校や学校のなかで分類されている各コースは、被調査者の集団特性に影響し、いくつか指摘しておくべきことがある。まず、次頁表一から表六に示す数値の通り、自宅通学がほとんどで、自宅の大きな画面で視聴することが多い。「ながら」視聴（何かをしながらテレビを見ている）が多く、「ながら」の行為としては「メール」が極めて多い。総じて、自宅で一日二〜三時間、夕食前後にメールしながら（その場にはいない誰かとコミュニケーションを取りながら）視聴しているようだ。

さらに視聴番組（具体的な番組名の記述回答）を集計すると、「ミュージックステーション」（テレビ朝日・兵庫地区の放送ではABCテレビ）、「メイちゃんの執事」（フジテレビ・兵庫地区の放送では関西テレビ）、「HEY!HEY!HEY!」（フジテレビ・兵庫地区の放送では関西テレビ）は極めて人気が高い番組であった。ほかにアイドルグループ「嵐」が出演する番組（「嵐の宿題くん」「ひみつのアラシちゃん」「歌のおにいさん」など）にも一部の人気が集まっており、人気歌手や若手タレントが出演する番組は人気が高かった。番組のジャンル（筆者が指定したジャンル名を複数選択で回答）としては、「トーク」「ニュー

ス」 「映画」 「アニメ」 に人気があった（表七参照）。

被調査者にとつてのテレビは、子ども全般に言われるような気分転換もあるだろうが、メールしながらの視聴が多いことと、特定の番組に人気が集まることから、友だちとの話題を常時更新してくれる情報源としても活用されていると考えられる。

表一 自宅通学

はい	いいえ
120 (99%)	1 (0%)

※一つのみ選択して回答

表二 視聴頻度

毎日	決まった曜日だけ	あまり見ない
103 (87%)	10 (8%)	3 (3%)

※一つのみ選択して回答

表三 視聴時間

1時間未満	2～3時間	4時間以上
71 (60%)	31 (26%)	3 (2%)

※一つのみ選択して回答

表四 視聴画面

テレビやパソコン (大) 120	携帯電話やモバイル機器 (小) 23
---------------------	-----------------------

※複数回答

表五 視聴態度

専念視聴 71	「ながら」視聴 86	録画 33
---------	------------	-------

※複数回答（「その他」を除く）

表六 「ながら」の行為

メール 73	インターネット 36	音楽 20
運動 19	ゲーム 19	勉強 19
家事 16	電話 13	食事 9

※複数回答（「その他」を除く）

表七 視聴ジャンル

ドラマ 108	トーク 80	音楽 88
ニュース 73	映画 64	アニメ 71
クイズ 52	ドキュメンタリ 27	スポーツ 23
ショッピング 7	教養 6	特に無し 0

※複数回答（「その他」を除く）

三、自由記述に見る中学生の表記規範

三、の分析では、二〇〇九テレビ視聴調査〈中学生〉問一一の自由記述による回答を用いる。問一一では、テレビ視聴とテレビの画像に被せた文字情報「字幕スーパームッシュは、文字テロップ」について感じるものがあれば教えてくださいと空欄を設け、自由記述を求めている（以下、テレビ画像に被せた文字情報は「文字テロップ」と称する）。本調査における最後の設問であるため、これまでの設問内容（選択肢など）に目を通す過程で、回答時間にゆとりがあれば、何らかの記述を試みるのではないかという調査者（筆者）の意図があつて設けており、有効回答として計八四名からデータを得た。

この記述から、本調査における中学生の表記規範意識として、（一）語句や文レベルでの整合性（使用語句の間違いや不適合な文があるか）、（二）文体の整合性（常体と敬体を混用していないか）、（三）表記の整合性（不自然な用字はないか）、といった点に着目して分析を加えていく。ただし、文長が短ければ整合性は高く、逆に文長が長くなるほど整合性が低くなる可能性がある。そこで、まずは文長について述べる。

（一）文長

文長は、先の（一）から（三）における調査目的から、細かい語の区切りを必要としないと判断してゆるやかに文節の単位で計量することとした。区切り符号は一文節とする。こうして計量する場合、一文節に付属語があつても、直前の自立語と区別せずに計量するため、長単位に比べて少ない数値となる。なお、絵記号や「笑」のように漢字一字を符号のように使用する回答では、そこに一定の意味を汲み取ることではできないものの、文節としての単位は為さないと見て計量しないものとした。

こうして計量した結果、全体の平均は一一文節であつた。このうち、スーパーサイエンスコースのみで平均を求めると一五

文節で、ほかの二コースに所属する中学生に比べて文長が長いという特徴が見られた（有効回答票は先に述べた通り八四票であるが、このうちスーパーサイエンスコースの中学生は四一名全員が回答していた。よって、本分析では四七パーセント、半数近くの回答がスーパーサイエンスコースの生徒で占められる）。

平均的な文長と、多く見られた構成を示すものとして次の回答例を挙げる。

（ア）テロップがあるのがあたりまえのような気がするし、何を言ったか分かりにくかった時とか便利。

（イ）映画の字幕がもうちよつと大きかったら見えやすいと思います。テロップは大事な所だけつけてくれたらいいです。回答（ア）は一文を一〇文節で記述している。一文の回答は五一例と最も多かった。（イ）のように二文のものが二八例、三文は五例と少数であった。構成に関して（ア）を見ると、「便利」のような感想部分と、「何を言ったか分かりにくかった時」のような状況や、「あるのが当たり前」のような理由・根拠の部分で記述している。このように、感想と、状況や理由・根拠を述べる構成が多かった。

（2）語句や文レベルの整合性

語句や文レベルで整合性の低いものはほぼ見当たらなかった。語句間違い（もしくは誤字）として（ウ）（エ）、文の不自然さとして（オ）、計三例を挙げる（下線は筆者による）。

（ウ）番組それぞれのテロップの出し方かあって、テロップのその番組の一部やと思うので、あつた方がいいと思う。あと、うるさい時に便利。

（エ）リアクションが大きいところとかがテロップとしてかいていて良く分かりやすいからいる！

（オ）字幕スーパは、内容がわかりやすくまとめられていて、分かりやすいです。

（ウ）は、「テロップのその番組の一部やと思う」に含まれるはじめての助詞「の」が主格を示すので、「が」もしくは「も」

がふさわしい。(エ)は「テロップとしてかいていて」に含まれる補助動詞「いて」は「あって」とすべきであろう。(オ)は、「分かりやすい」という感想に対し、その感想そのものと同様に解釈できる「わかりやすくまとめられてい」という根拠であるから、意味として循環している。

なお、次のような回答は、話しことばらしいスタイルとして、語句使用の不整合とは見なさなかった。

(カ) とくにー〈笑〉

(キ) たまにうつとーしい所がある…。

(ク) 分かりやすくて良いと思う。なにゆーてるか分からん時見て分かるから良い!

(ケ) 朝の6チャンネルの時間が細かくわかるのがいいなと思う(ちがうかもですケド)

(カ)「とくにー」は「特に記述することがない」の後述部分を省略したものだとして解釈した。(キ)「うつとーしい」や(ク)「ゆーてるか」は、口語を反映した表記であり、(キ)「うつとーしい」「鬱陶しい」、(ク)「言ってるか」が一般的な表記とされるだろう。(ケ)「ちがうかもですケド」は、「設問で求められている回答は私の回答結果と違うかもしれないですけれども書きました」という断り書きを省略して述べたものだとして解釈した。(ケ)の内容に関し、筆者が「朝の6チャンネル」として「おはよう朝日です」(ABC放送)を視聴したところ、画面左上に提示される時刻、例えば午前七時三〇分を示す「07:30」の「30」について、秒が進むに従って文字色が変わることを確認した。つまり、文字テロップの数字によって時分が読み取れるだけでなく、文字テロップの色の変化によって秒まで読み取れる、その文字テロップの使用について「いいなと思う」という感想を述べたものだと解釈される。

こうした例のように、全体的に口語を意識した表現が見られるものの、文や語句の整合性は高い。

(3) 文体の整合性

一人の回答のなかで、つまり、ひとまとまりの文章（もしくは文）のなかで、常体か敬体のいずれかに統一が取れていないものを計量したところ、次のようなものがあった（下線は筆者による）。

(コ) HEY×③とかの字幕はおもしろいから好きです。おもしろさが増すし、わかりやすく、耳の不自由な方でも楽しめるのであった方がいいと思う。

(サ) ・トーク番組などでは、必要な時や、おもしろいことを言ったときしか、でないけど、要点が、つかめておもしろいと思います。

・ 見ている側も絵だけより、文字をみていた方が、ひましない。
・ 字にも、大きい字や、小さい字、ギザギザなかんじの字などが、あつたりするとより、おもしろい思います。

(ク) は一文目が「です。」という敬体で終わり、二文目は「思う。」と常体である。(サ) は、一文ずつ計三文を簡条書きにしているの、書き手にとって回答全体(三文)を統一させようとする意識が低かったのだと考えることもできる。一文目は敬体「思います。」、二文目は常体「ひましない。」、三文目は敬体「思います。」であった。

先にも述べたように、一文の回答が五一例(全体の六一パーセントを占める)であるうえ、二文以上で無ければ文体の整合性は問題にならない。その中で例示すべきものは、この二例のみであった。

(4) 表記の整合性

表記は、中学生にとって既習の教育漢字(8)がかな書きであつても、交ぜ書き(9)でなければ表記の整合性は取れているものとみなした。表記を問題にしなかつたものとして次の例を挙げる(傍線は筆者による)。

(シ) 聞こえなかつた時や、聞きとれなかつた時にあるとすごく便利でたすかっています。

(ス) 字の太さが細かったりしたらみにくい。

(セ) 耳が聞こえない人がいたら べんりだと思う。

(シ) は、「たすかって」を「助かって」と表記することもできる(「助」は小学三年生で学習)。同様に、(ス)は「見にくい」「見」は小学一年生で学習)、(セ)は「便利」(二字とも小学四年生で学習)と表記することが可能である。これらの回答は、しかし次の(ソ)の「交ぜ書き」のように嫌悪される表記形式に比べて、整合性が取れないということにはならないと判断したものである。

(ソ) 邪まなときとときがある！ でもあつたほうがいい

この冒頭の一語「邪ま」は「邪魔」と書くことができる(なお、質問紙にこの熟語は含まれず、設問において当該の表記形式を読むことはない)。この熟語は二字とも常用漢字で表記することができ、「邪」は中学三年生、「魔」は小学一年生で学習する。未習であるものの画数の少ない「邪」のみが漢字表記になっているため、回答時間を考えて画数の多い漢字「魔」を避けたとも考えられる。ともあれ、中学二年生の回答者が、未習漢字を交ぜ書きにして、その一字以後はすべてかな書きであるのは違和感が残る表記であると判断した。

表記において問題とした回答は、この(ソ)一例のみであり、回答した中学生全体で言えば(2)で扱った語句や文、(3)で扱った文体と同様、ほぼ問題にならないと言つてよいだろう。よつて、本調査における中学生の表記規範についての意識は高いと言える。ただし、自由記述欄にあえて記入している中学生であるので、元来言語(特に文字)によつて表現する意欲が高いと思われる。この表現意欲の高さが、正しい表記規範を要求したのかもしれない。また、今回の分析に用いた回答は(1)文長で確認した通り、比較的短くて単純なものが多いことも影響しているだろう。

四・自由記述に見る中学生の文字テロップ観

ここでも三と同じく二〇〇九テレビ視聴調査〈中学生〉問一の自由記述による回答を用いる。中学生が、テレビの言語表現である「文字テロップ」にどのような見方をしているのか、どのような意識を持っているのか、それらを「文字テロップ観」として分析する。単純に良し悪しを述べるのではなく、文字テロップのどの点がどのように（現象）、何のために（理由・根拠）良いのか、あるいは悪いのかを述べる回答結果を抽出した。すると、（1）音声の視覚化、（2）訴求性の強化、（3）感情や個性の表現、といった三点に集約されることがわかった。

（1）音声の視覚化

文字テロップに表記されている事柄は、音声と重複していることが多い。筆者が二〇〇五年に調査した時点では、バラエティ番組における、何らかの音声情報（出演者の発言やナレーションによる説明など）を伴う文字テロップと、音声情報を伴わない文字テロップの比率はおよそ七対三であった。回答では、音声情報を伴う文字テロップに対して、具体的な現象を添えて述べたものが数多く見られる。例えば、次に挙げるような回答である。

（タ）何かをしていて、聞こえなかった時、文字テロップがあると、その人がどんな風に言ったか、わかるからいいと思う

（チ）耳の悪い方などにはとてもいいことだと思います。ちよつとききとりにくいときに文字テロップがないと困ります。

（ツ）字幕スーバーがあった方が、目で字が読めて、耳で聞くことができるので、見てておもしろいし、ちゃんと聞こえなかったとか、目で見て確認できるので、いいと思います。

（タ）は、文字テロップを見ることで話した様子がわかるという主旨である。何を言ったか、ではなく「どんな風に言ったか」

という記述からは、話した内容だけでなく、様子が読みとれるということであろう。この点については(3)で改めて述べる。

(チ)は、聞き取れない内容が文字テロップによって理解できるようになることを指摘している。回答者の聴覚に障害がなくとも一般の視聴者として聴覚障害者を想定した回答はいくつも見られた。テレビ放送では、それを選択すれば提示される字幕放送によって聴覚障害者に対応しており(ただし、全ての番組ではない)、文字テロップと異なる形式で音声情報が補助されている。回答者はそのことを知らないのだと考えられる。とはいえ、中学生の文字テロップ観として、おそらくは字幕放送の理解が浸透しないまま、健常者と同じ条件で音声情報が補助されることは良いことであると受け止めていることがわかった。

(ツ)は「目で字が読めて、耳で聞くことができる」「ちゃんと聞こえなかったとか、目で見て確認できる」として、(タ)(チ)と同じく音声情報が文字テロップで読めることに加え「見ておもしろい」という意見である(面白さについては(2)で述べる)。

ここに示す三例のように、回答した中学生にとっての文字テロップは、言ったことが書いてある現象であり、聞くことが困難な状況で視聴することがあるために良いとされている。聞くことが困難な状況としては、視聴側の問題としてリビングで見ている、周囲がうるさい、耳の不自由な人がいる、といった回答が散見された。一方、話し手側の問題として方言、声が小さい、滑舌が悪い、といった回答が見られた。また、言ったことが書いてある現象とは、(ツ)「おもしろい」や次に挙げる(テ)(ト)のように、表記内容や表記形式によって面白さや楽しさにも結びつくこともある(傍線は筆者による)。

(テ) 面白いところや重要なところなどがかかれていたら おもしろいしわかりやすいからあった方がいいと思う。

(ト) おもしろい所やこわい所とかはその場面において字体を変えてあったりしておもしろいしみやすい。

(2) 訴求性の強化

先の(テ)にあるように、文字テロップは「面白いところや重要なところなどがかかれて」いることがある。つまり、面白

さや要点が音声や画像で認識されるとき、同時に文字テロップを見ることで、視聴者は聴覚と視覚の双方によって知覚することがある。その場合、情報の発信者から受信者に対する訴求性が強まると考えられる。この点について意識している回答例は次の通りである。

(ナ) いつも習慣で読んでしまいます。特にバラエティ番組などでは、おもしろいところを文字が教えてくれるので、笑いがいつそう増えます。

(ニ) 文字に大小があつて感情表現が分かりやすい。

(ヌ) 話す人によって、文字の色をかえていてわかりやすい。文字の方が正確にわかりやすく説明していてくれる。画面より早くに何をいうか表示して次々と考えやすい。

(ナ) は、文字テロップが「おもしろいところ」を教えてくれることによって、より一層「笑が増える」、つまり番組をより一層面白くするものとして文字テロップが有効だと言う。この中学生にとつて、面白さを訴える力が強まったことを示している。(ニ) は「感情表現」の分かりやすさについて述べている。この意見は(ヌ)「文字の方が正確にわかりやすく説明していてくれる」と同じく、音声に伴つて文字テロップが存在することから、文字テロップが音声に従うものではなく、「従」ではなく、同等に受容され、文字テロップの方が受容しやすいものになりうる現状を述べている。

テレビの番組制作の過程では、録画した音声情報(または、録画に被せたナレーターによる音声情報)が先に存在し、その音声が聞こえるタイミングで文字テロップを被せるため、文字テロップは音声情報に従つて制作されている。いわば、音声情報が文字テロップに対して「主」、文字テロップは「従」なのである。しかし、一般の視聴者にしてみれば、聞くのも見るのも同時であるから、当然(ヌ)のように文字テロップを「主」として回答する中学生もいる。

これは、音声情報に基づいて表記された内容や形式が、中学生の表記意識に合致して読みとりやすいものである場合、音声より文字テロップの方がわかりやすいとなるのであろう。ただし、文字テロップが音声に重複するとはいえ、何の作為もなく

自動的に産出される文字表記ではない。テレビの番組制作者が意図して作り出した文字情報である。この点を踏まえると、中学生にとつての文字テロップは、要点を示す現象であり面白さや分かりやすさなど、テレビ番組制作者が作り出した「情報」をより便利に受容できるように良いとする肯定的な受容が為されているのである。

(3) 感情や個性の表現

先の例でも(タ)「どんな風に言ったか」や(ニ)「感情表現」、(ヌ)「話す人」に見られるように、単に「言ったことが書いてある現象」としてだけでなく、「誰がどんなふうに行ったのか」が伝わるという、文字テロップの表現性を意識した回答があった。先の例以外では、次のようなものがある。

(ネ) 字にも、大きい字や、小さい字、ギザギザなかんじの字などが、あったりするとより、おもしろいと思います。

(ノ) 番組それぞれのテロップの出し方とかあって、テロップのその番組の一部やと思うので、あった方がいいと思う。

具体的な字の形を述べる(ネ)は、字体(もしくは書体)の変種が多くあること、それによって面白さが演出できることを述べている。(ノ)はそうした演出が番組の性質によるものであり、番組個別の性質を重視している。

文字テロップは多様な音声を視覚化することから多様な表現性が生じている。この点に注目する中学生にとって、文字テロップは話者の感情や特性を表現するものとして受け止められているのである。また、これらの表現が番組ごとに異なっていることから、番組の個性を描出するものとして受け止めることもある。

つまり、文字テロップは話者の感情や番組の個性を表現する現象となっていて、面白さの強調や番組の個性発揮につながるものだから良いと歓迎しているのである。

五. まとめ

中学校学習指導要領では、第二章各教科 第一節国語 第一目標に「伝え合う力を高める」ことを明記している。三点に集約した中学生の文字テロップ観から、この「伝え合う力」に反映される、中学生の言語表現力を左のように整理した。

一、 音声の視覚化

文字表記が言語表現のための視覚記号であることを了解する

二、 訴求性の強化

文字表記による情報の重複が伝達に有効であることを認識する（ここで有効とは、情報を受容する側への印象を強めるのに役立つこと）

三、 感情や個性の表現

定型の表記法に捕らわれず感性豊かな表現性を感じとる

一、については、文字の基本的な機能として文字を学習するとき了解する事柄であり、もっとも幼い子どもたち（例えば小学生や早期教育を受けた幼児等）にも了解されている可能性が高い。

二、について、子どもたちは学校教育（教科書の音読や発表など）を通じ、音声と文字表記が重複して情報を伝達することを体験している。しかしその体験があるからと言って、情報を受容する（または発信する）とき、どのような効果が発揮されるかを認識しているとは限らない。一方、音声と文字表記が重複して情報を伝達すれば訴える力を強くする効果があるのだと認識することは、映像メディアに接するとき知っておきたいリテラシーの一つであるし、「伝え合う力」に結びつく知識だと思われる。それが中学生に浸透している現状を確認した。

三、について、表現性豊かな表記法は、正書法のような唯一の書き方に限定されないことで可能となる。一方、学校教育（作

いれるの(文字とか)大変なかなかあ
放送部でテレビ番組つくってるから
参考にしよう(ハ(°ω°)ハ☆)

あ、た、ろ、が、何、か、お、も、ろ、い、(☺)!

(^o^)/なーし

←(°ω°)→
グーン

書体がおもしろい(みこい?)番組は観ていて楽しい、まわりがうきさい
ときなど、景色がよかったほうかいいと思いきず(°▽°)!

文指導など)では正書法となる表記規範を教えるし、中学生の表記に對する規範意識が高いことは「三、自由記述に見る中学生の表記規範」で確認したとおりである。子どもたちは規範を知ったうえで、あえてそれを外れてこそ、感情や個性といったものが表現できることを了解し、文字テロップの表現性を感じ取っていると考えられる。このことに関し、回答末尾に上図のような符号を用いる例を確認しておきたい。

図一の丸囲みに示したような「顔文字」と呼ばれる符号の連なりや記号は、表記規範を逸脱して楽しむ表記法だと考えられる。こうした規範からの逸脱を志向する表記について、「^②コミュニケーションに積極的な者たちの、現代社会を反映した、いわば新しい表現意欲と方法の展開」とする見方があり、コミュニケーションに積極的な中学生が表現意欲を表明したものだと位置づけられる。

コミュニケーションに積極的な中学生にとって、映像メディアの表現性は魅力的なものなのだろう、図一の上段に挙げた回答の表記内容には「いれるの(文字とか)大変なかなかあ 放送部でテレビ番組つくってるから参考にしよう」とあり、模倣によって文字テロップの表現を学んでみたい、という意欲が見られる。それは、自己の言語表現力の糧となるもので、「伝え合う力」を高めることにも結びつくだろう。

さらに「伝え合う力」として定着させるには、どのようなときどのような

な読み手なら「表記規範の逸脱」が許されるのかを自覚して使い分ける力が必要になる。スーパーサイエンスコースの被調査者に回答率が高かった（一〇〇パーセント）こと、同コースの被調査者は文長が長かったことに加え、図一のような顔文字が見られず、他二コースの回答のみに顔文字が見られた。今回用いたデータによってスーパーサイエンスコースの回答者に表記法の使い分けが為されていると断じることは難しいものの、表現性を感じとることと、表記法を使い分けることは、同時に獲得されるものでないと考えられる。

表記法の使い分けとは、書き手と読み手が親しい間柄なのか一定の距離を置くべき間柄なのかといった親疎関係や、表記する場がくだけたものであるのか改まったものであるのかといった場のあらたまり度合いなどに関わると考えられるが、子どもたちの言語表現力に準じた使い分けは、今後の課題としておく。

注

(1) NHK放送文化研究所『2010年国民生活時間調査 報告書』（平成二十三年二月）

参照URL：<http://www.nhk.or.jp/bunken/summary/yoron/lifetime/pdf/110223.pdf>（平成二十三年一月一〇日）

(2) 社団法人 日本PTA全国協議会『平成二十二年 マスメディアに関するアンケート調査 子どもとメディアに関する意識調査 調査結果報告書』（平成二十三年三月）

(3) 白石信子・中野佐知子「変わらず高いテレビの役割〜2009年6月「小中学生のテレビ・メディア利用実態調査」から〜」NHK放送文化研究所編『放送研究と調査』（平成二十二年三月）

(4) 二〇〇九テレビ視聴調査は、大学生や高校生、一般成人も対象にしているが、本稿では学校で国語教育を学習する中学生に絞って分析する。本稿における「中学生」とは、言語形成期にあつてメディアの影響を受けやすい子どもとして位置づけるものとする。なお、本調査は国語科教諭を通じて実施しているため、被調査者にとって「国語に関連するアンケート調査」という認識があつたと思われる。

(5) 武庫川女子大学附属高等学校は、平成一八年から文部科学省によるスーパーサイエンスハイスクール（SSH）指定校となっている。中学校入学時よりコース別になっており、本コースに所属する生徒は高等学校の当該コースに進学する。

(6) 筆者が行った二〇〇九テレビ視聴調査における、男女共学の大学生の結果と対比すると、この集団の特異性が際立つ。例えば、大学生は授業時間に加えてアルバイトなど拘束される生活時間が不規則かつ、長いためであろう、テレビを「あまり見ない」という回答も少ない（有効回答票数一八一のうち四九つまり、二七％を占める）。また、視聴時間は「二〜三時間」が多いものの、「一時間未満」もや見られた（有効回答票数一八〇のうち三四、一九％である。「ながら」の行為としては、基本的な生活の一部にテレビ視聴が入り込んでいるようで「食事」が圧倒的に多い（複数回答において二七、なお「メール」は九二）。娯楽のため、忙しくても好きなものは「ながら」視聴で見ておこうとする視聴形態がうかがえる。

(7) 回答を引く場合、表記符号を統一していない。これは、句読点なども含めて回答結果になるべく忠実に表記したためである。

(8) 「小学校指導要領 第一節 国語」にて「学年別漢字配当表」に示された学年別に「漢字を読み、漸次書くようにすること」とされている漢字（合計一〇〇六字）を指す。

(9) 「拉致」を「ら致」、「破綻」を「破たん」のように、かなと漢字で熟語を表記した形式。新聞やテレビなど公共メディアにおいても、熟語に常用漢字外の漢字が含まれる場合、交ぜ書きをすることがある。

(10) 中学校で学習する漢字。なお、通常の新聞等マスメディアの文字表記で常用漢字が用いられることを踏まえれば、中学生の文字生活では目にする頻度が高い漢字であると言える。

(11) 設樂馨『バラエティ番組35種における文字テロップ』（『かほよとり』平成一七年 武庫川女子大学大学院文学研究科）

(12) 三宅和子『日本語の対人関係把握と配慮言語行動』（平成二三年 ひつじ書房 p.229）

（したら・かおる 本学助手）